

“Me First” Politics

大住憲生と中野香織が考察

「ミー・ファースト」な政治指導者の○と×

ジャケットの前ボタンを頑なに留めないトランプ大統領や、ソックスで主張するトルドー首相……。彼ら政治的指導者たちのこだわりの装いは何を物語るのか。業界のご意見番、ファッションディレクターの大住憲生さんと、服飾史家の中野香織さんが考える。

まとめ・今尾直樹 写真・鶴岡義大

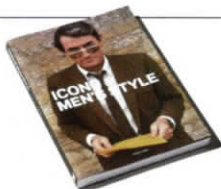
——「ファッションはミー・ファーストで！」といっても、ミー・ファーストのやりすぎという問題も出てきます。そこで、世界のリーダー、著名人の服装術を参考にしながら具体的に、ミー・ファーストな装いについて語っていただきたいと思います。

中野 『アイコンズ・オブ・メンズスタイル』という洋書を持ってきました。クラーク・ゲーブル、フレッド・ペリー、ピカソ、ジャック・ケルアックなど、いろんな分野の50人が選ばれていますけど、全員に共通するのはシンプルだということ。いつも同じ服を着ているからアイコンになりやすい。いろんな服のイメージがあるとアイコンになりにくいのかな、と思います。

大住 何を着るかというのは、結局のところ「印象操作」ですからね。

中野 流行りの言葉でいえば(笑)。今年、**トム・ブラウン**もいってました。なんで男性服にたくさんのバリエーションが必要なんですかって、反語的に。ブリーツスカートとジャケットと4つぐらいあればいいと。テイラードの技術でつくったワンピースも提案していたのは面白いと思いますけど(笑)。

大住 もしも、このワンピースが爆発的にヒットしたらトム・ブラウンの力は本物ですね。僕もなるべく、経済的な理由もあって、あれもこれもと着ないようにしているんですけども、女性の側から見てどうなん



『アイコンズ・オブ・メンズスタイル』

ダリのコートから、ポール・ニューマンのデニムまで。男のワードローブに必要なアイテムを紹介。



ドナルド・トランプ

ひとまわり大きなサイジングのネイビースーツ、赤いパワータイ、わざと長く詠った裾と袖が特徴。



エマニュエル・マクロン

スリムフィットスーツにナロータイが若々しい印象。大統領夫人はルイ・ヴィトンのリースを利用中。



トム ブラウン SS2018

2018年の春夏コレクションは、7割のモデルがスカートをはいって登場。来季のトレンドになるか？

ですが、男の服装について。

中野 ノームコアができるのは幸せです。女の人でいつも同じかっこうで過ごすというのは……。修道院のシスターぐらいしかカッコよくなれない。

大住 あとは喪服とか……。

中野 ただ、ノームコアをいはいはじめた「The Cut」という雑誌が、「ノームコアはもう古い、今度はゴープコアだ」といい始めています。ゴープというのナッツとドライフルーツをミックスした、登山なんかのときの非常食みたいなスナックのことで、いかにも戦場のような都会でサバイバルをするようなスタイルで過ごすための、アスレジャーよりハードコアな装いです。テロや自然災害がいつ、どこで起きるかわからないから、という社会状況を反映したのもでもあるし、みんなノームコアになったときに差別化しようとする、こっちなというので提案されていると思った。

印象操作

——という大きな流れがあるなか、話をスーツに絞って、世界のリーダー、アメリカ・ファーストの**トランプ大統領**のおやじファッションはどうですか？

中野 彼は若い頃から、ジャケットのボタンはとめないし、ネクタイはベルトより下にさがっている。誰が注意しようと皮肉ろうと、これ。これこそミー・ファーストです。でも、アメリカのブランドじゃなくて、たしかブリーオーニの仕立てです。

大住 この大きい感じが好きなのでしょうね。

中野 一応、シャツとかネクタイとか、ドナルド・トランプブランドも展開している。それを自分で着ているかどうかはわからないんですけど、不思議な人です。あんまりカッコよく見せないのがポリシーなのかもしれない。カッコよすぎると大衆がついてこないのを知っているから、わざと土建屋、不動産屋さんな感じにしている、としか思えない。

大住 誰も真似したくない、というかっこうを堂々としているのだから立派な人です。ネクタイもLサイズ。深読みする人は、ネクタイって男性性、ペニスの象徴だから、あの人はでかい。でかいという問題があるから精力的、男性的という印象を得ようとしているのかもしれない。

中野 それは読む人の勝手ですね。

大住 どこまで先を読ませて、あるところで裏切るといような、小説家みたいに手練手管をもって、読む人を翻弄するような服装術をしている人がいたら、会ってみたい(笑)。

——一方で4万円ぐらいのスーツを着ているフランスの新大統領の**マクロンさん**は？

中野 この人、出馬したときは1000ユーロの高級スーツだったんですよ。それで「庶民は1000ユーロのスーツは着ない」と記事に書かれてダウングレードした。その後、ライバル候補のフィヨンさんがアルニスのスーツを友人から提供されていることが問題になって、フィヨンは「それがどうした？」と開き直った。それを機にフィヨンは大統領選から一步引くことになり、

ラッキーなマクロンさんはさらにダウングレードして、大統領の就任式に着たのが既製のこのスーツです。

大住 見事な印象操作ですね。

中野 マクロンさんにとっては、既製服を着て大統領に就任するというのはいままでの大統領とは違うんだよ、というメッセージですね。しかも、既製服は若くてスタイルがよくないと着られないから、若々しさのアピールにもなる。

大住 基本的に白いシャツに紺色のネクタイしかない。これも印象操作です。政治家、とくにフランスの政治家って白いシャツに紺のネクタイ、紺のスーツって多いですね。なんか理由があるんですか。

中野 フレンチシックですかね。フランス人はあんまり色を使わない。アメリカの政治家は赤とか黄色とか、ネクタイに色の意味を込めますけど。

大住 赤は情熱とか、青は信頼とかね。信じるかどうかは別にして。

中野 フランス人は内心、馬鹿にしているかもしれない。いつも濃紺だったら意味が生じないです。日本の**安倍さん**は黄色に青ストライプのタイをしたりする。本人は正しいつもりで葬式のときもネクタイにディンプルをつくるそうです。

大住 え、葬式のときはいけないうんですか？

中野 ええ、政治家の世界ではディンプルは葬式のときはつけないという暗黙のルールがあると、某政治家から聞きました。でも、安倍さんは、それを無視している。「政策は注意できても、装いは注意できない」のだそうです(笑)。政治家の世界も不思議です。

大住 政策が注意できているのならまだいいけど。「こんな人たちとあの人にはいわれたくない」という関西の人がつくった川柳があるぐらいですから。

中野 **ザッカーバーグ**も基本的にグレーのTシャツで、その理由を朝、洋服を選択するのに時間を使いたくないからといってます。彼の場合、ここぞのとき、たとえばハーバードの卒業式でのスピーチのときに青いスーツを着て登壇し、なんとなく板についてない。そこがいい。特別な機会だから頑張ってる、という感じが初々しくて私は好きです。

大住 うまいですね、ある意味。そういう印象を相手に持たせるというのは。

——カナダの首相の**トルドーさん**は派手な印象があります。

中野 靴下がポイントです。このあいだ、左右違う色の靴下をはいていた。カナダのメイプル柄とか、ドク口の柄とか、いろいろあります。トルドーさんだから許されるギリギリのところ。なにげに既成のコードに抵抗しているんでしょうか、靴下で。

大住 今年5月のサミットのときも茶色の靴でした。

中野 政治家は基本的に靴は黒というところになっている。トルドーさんは政策も自由というか、古いコードには従わない。そういうものがチラチラと出ているのかもしれない。カナダは違うんだ、もっと自由なんだ、と。黒靴のネットワークに入っていないから、僕は、と主張しているようにも見えます。



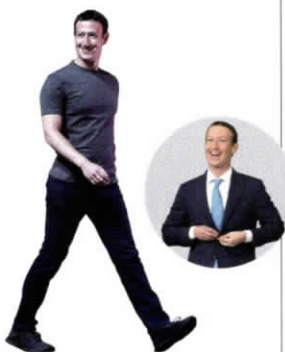
石津謙介

ヴァンジャケットの創業者。アイビーを日本に紹介し、若者のファッション文化に改革をもたらした。



安倍晋三

礼服にディンプルをつくってはいけないルールを拒否。ミー・ファースト、友達ファーストの面目躍如?



マーク・ザッカーバーグ

Tシャツとジーンズがユニフォーム。いざというときのスーツ姿が新鮮で好感度が持てる、と中野さん。



ジャスティン・トルドー

イケメン首相で話題のカナダの首相。お茶目なキャラクターを生かした靴下アピールも効果大。

新しいのがいいという価値観はなくなる

大住 **石津謙介先生**がおっしゃったように、TPOをわきまえた上で、オシャレな人はちょっと冒険してみようということも、ま、やりたければやれば、ということですね。

中野 法律があるわけじゃないですからね。それこそカスタム(慣習)とのせめぎ合いで、結果的に自由を獲得することになる。ミー・ファーストを貫くと、いい悪いとは別に社会的な立ち位置というか評価が見えてくる。トランプさんの場合だったら、洋服業界のひとが何をいっても意味がない。束縛されたくない。俺に常識を説かんでくれ、というのを全身でアピールしている。

大住 まあ、スーツにしてもネクタイにしても、昔は流行がありましたけど、いまは違いますからね。たとえば、エルメスのネクタイ・コーナーに行くと、幅広から細みみたいに細いのから、もうなんでもある。

中野 だから選びにくいんじゃないですか。自分でこうしたい、というのがないと。

大住 ミー・ファーストじゃないとね。「新しい」からいいという価値観もなくなっている。

中野 そう。女性服もそうですけど、ヴィンテージというのも入り込んできていて、古着のほうが格上に見えたりする。80年代とか70年代って、生地とか仕立てがいいから。

大住 深みとか厚みとかがあってね。

中野 いまリフォーム屋さんが活況を呈している。30年前のスーツをその人に合わせて仕立て直して着ている人、けっこういますよ。「私に合わせて」という形になっている。

大住 お直し屋さんの戦国時代。ま、それこそミー・ファーストの表れですね。こじつけけど(笑)。



大住憲生

1954年熊本県生まれ。「ENGINE」(新潮社)などでファッションエディターを歴任。都市と森との関係や地域のブランディングを目的に設立された、モア・アトウリーズ・デザイン取締役スーパーバイザーを務める。



中野香織

エッセイスト/服飾史家/明治大学国際日本学部特任教授。ファッション史からモードまで、幅広い視野から研究・執筆・レクチャーをおこなっている。著書に「紳士の名品50」(小学館)、「モードとエロスと資本」。